

日本神経学会

会員各位

謹啓 時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

此の度は、第 57 回日本神経学会学術大会に多大のご支援をいただきまして、誠に有難うございました。幸い連日好天にも恵まれ、お蔭さまで 7,463 名という多くの皆様にご参加いただきまして、神戸での初めての学術大会を無事終了することができました。これもひとえに皆様のご協力、ご支援の賜物と、心より御礼申し上げます。

徳島大学神経内科は 2000 年 11 月に私が初代教授として赴任した後 2003 年に正式に神経内科の講座として開設されました。歴史が浅くスタッフの数も少ない主催校であったため、至らぬ点も多々あったことをお詫び申し上げます。

当教室では、開設以来、一貫して「なおる神経内科」を目指しておりましたが、それを今回のメインテーマに、また教育セッションを増やして「わかる神経内科」をサブテーマにさせていただきました。「なおる神経内科」に関しましては基礎研究から臨床試験まで幅広くご発表をいただくとともに日本医療開発機構および医薬品医療機器総合機器関係者にもご講演いただきシンポジウム「行政のキーパーソンに聞く神経疾患研究への期待」「世界に発信する日本の創薬：神経難病の克服に向けて」を実施いたしました。「わかる神経内科」として教育企画は全て教育委員会とともに構成した学術大会教育プログラムワーキンググループによって作成いたしました。その分野における大家によるレクチャーマラソンとともに少人数事前登録制による教育コースを本大会の目玉として実施いたしました。特に教育コースは 40 を超える多彩なコースがほとんどで立ち見がでるほどの盛況をみました。多くの先生にご提案をいただき講師もおつとめいただき誠に有難うございました。特別講演の聖路加国際病院名誉院長日野原重明先生の「ウィリアム・オスラーと診断の技」は多くの参加者に深い感銘を残しました。熊本大学神経内科の安東由喜雄教授に「熊本震災における神経内科力」として熊本の現状の緊急報告を、また最終日には「新・神経内科専門医制度について」を開催し貴重な提言を多数いただきました。シンポジウム「神経内科で留学しよう」は留学を少しでも考えている先生にとっても有意義なものになりました。会期中および大会終了の翌日に開催しました市民公開講座におきましては医師のみならず患者さん・患者団体の皆様からもご発表をいただきました。最終日は宮井一郎会長による第 7 回日本ニューロリハビリテーション学会学術集会との同時開催とさせていただき合同シンポジウムを実施いたしました。両学術大会への参加に便宜をおはかりいただいた宮井先生に深謝いたします。

プレナリーレクチャーとして Stanley Fahn 先生に「Development and Evolution of the Concept of Dystonia」、Mark Hallett 先生に「Diagnosis and Management of Psychogenic Movement

Disorders」をご講演いただきました。来年に京都で開催される世界神経学会議（WCN2017）に向けて英語セッションの充実もはかりました。その結果として、海外 33 か国から、招聘講演者と一般参加者を合わせて 231 名に参加いただき、一般演題の英語セッションの比率は口演の 65%、ポスターの 33%となり学会の国際化を一層推進することが出来ました。

神戸大会の全日程が無事終了しましたこと、また大会を大いに盛り上げていただきました皆様に重ねて心より御礼を申し上げます。神戸大会での皆様のご活躍が日本神経学会のさらなる発展に繋がることを祈念いたします。徳島大学神経内科の医局員、および学術大会運営事務局一同、神戸にありながら徳島も感じていただくおもてなしを心掛けまして、精一杯大会運営にあたらせていただきました。会期中は不行届きの点も多々あったかと存じますが、何卒、ご寛容下さいますようお願い申し上げます。本来ならば、拝眉のうえ御礼を申し上げなければなりません、略儀ながら御礼のご挨拶とさせていただきます。

末筆となりますが、皆様の益々のご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

謹白



平成 28 年 5 月 31 日

第 57 回日本神経学会学術大会 大会長

徳島大学臨床神経科学（神経内科） 梶 龍児

【大会長校事務局】

徳島大学大学院医歯薬学研究部医科学部門内科系臨床神経科学分野

【学会事務局】

日本神経学会事務局

【運営事務局】

第 57 回日本神経学会学術大会運営事務局（株式会社コングレ）